

新選百物語卷三

○立見りしが因果此始

列女傳云陰徳あるものの陽を以て報せしむれ  
ハ陰徳を有るものいまだく忽又報る事一たび堂岸とある  
すべし義此乃小善を有るものいすれく徳  
のさる小善を有るものい善てのさる人  
て懐むべきの徳ぞう今いむ西國の盲  
目に可憐と云ふの年々伊勢桑文の書り  
て同國の人毎年桑宮のよれ何とをけり  
るれりしたのいせとを盲人此年され

人道中若芳をいいて同をせりく可憐  
つねいしとをいせり思いてある年の春不  
甘の立同道人もかく一人幼そる烟を  
てまに身も半不定されば御門跡を  
と教年朱たくと一合子百両懐中一太鼓  
つと一言して實の如くをと諸がらて  
どくさ枝の送るわへ人かかくいひせん  
さすむ折くくさるは是善少ゆれを杖を  
近づきとるを奈良への道をさるく  
あめれいもて衣いさうせの半那  
重を之を



人共うき何ものかれを旗人をとて一旗狼藉不  
の井戸ぞと彦を多田と少とを騒ぐどこの令  
傍と引たふとささくそのとあつそふうら  
くや栄よの横雲ふまびと旅人の後集後をれ  
がたけられて一ス判と痛り一かうだんせ  
まの忍腹は突らあハウをうりいのうむれと  
おにマダてこまなはあ井のまけ金ぬもま  
とて盲人をむごけうあう突とよう殺と  
退つけ思い知うと一と罵まはせらあひる  
金持とかのれが不運こ一やいと候とさされ

新選五物語

あまの授よりいよせく吠のそりてあは伝出  
さぬ懐中一死殺のく人の見向とせどこれ  
えのれがとまゆる博奕にのり考とま一博  
やうり考せしあつかるまや博奕りうら  
負あう残念やと思小折うる男子或人むけあ  
が六月此もつくと傷をせし二二人不  
かるそれよと別れ又因窮しけを何と我  
場を遁まんとまぬくに思棄とめし目村  
よ文治とて極刑のものありたるが眼病はう  
て耕作もつるいかに極摩と業と一ま

に福の半されが家内は費ふとそましく恨  
くと銀子と貯へ諸人より傍つ市利假そより安  
ぬ世をよれり傳六吃しあつての然き此中  
かれをよのえれは勤をよし或夜傳六のえ  
引困窮れより一をいり令子武あわれ  
を夫婦の者とも尚不を去る合とあふあ  
人より救ひの運か返弁の年月限可にも相違  
つよと極とと後とまうたのえけは女治始終を  
すをけ鬼もあざむく強氣の傳六あまるとま  
いりくさんと令子と武あまらりあつす

新選百物語二

切ては中であくまをその子と裁て唯今の所  
厚恩忘却いませしと厭まて退後つらり  
歎りいすは博奕仲間當分はけさ一が一月  
あましたるものよと身も毎らゆもあまそく  
謀方をひらて一日書しどふのうろと思案の  
る中女治のさう毎日僅返答にわめとも  
ぬけつるアウムのたやが女治を今の持の  
て胸を定めて居置假傳六もも駭りてを横  
にさうりの子扱ふ都合とせぬ世間を争う女治の  
すみのんあはれ刻とるに假使され傳六の



山

越えたりと云ふやうに今人の詞乃思く金命の才  
そと思ひに今の詞れよくに此傳書に金  
付書と書きしに看てそと申の才外の人や  
いせど目の跡の直直きの着るるや月と光  
や外でいふとよく思ひの才  
それとも慈悲と義理とに依るる金  
色にまじりたるは清くのらへり  
をちくげつとくは是は極く  
古いかうと云ふは素人をそむと  
あやまり申しと云ふはと堪  
又ははるる天  
下

新選西物語

の九

石くすくすに妙つぎ煙香うむ  
肩きたらつてつき  
御よせぬをバ詞を  
どもしよきやう  
今青れ  
して酒をそのへ  
て先や  
今今の後悔  
てい

のまは侍の憂ふるをよ共のれは我當も其のま  
どれ共のそと茶後まはる少二三盃酒のまはる  
加減を足合せのり持方小狼狗肋の下と合  
させバツ下のりけふをくれ目のおまきの中  
まをほしとるくみねびりに服指とりま  
そのまが喰をひさ切く臍跡より死にけりが侍  
の海女の森のうらやみひ其髪に西のものをも  
あつまりまほく小若生せがめる目侍は俗人  
むくいこれぞ全く無業のつをくしてけ苦痛  
何をひくせん今年け去盲目を切殺し懐中

新選百物語三

の金子と盗む甚四討の老女 若くは俗は切れ  
一夜より盲人の婆わられおまきとそんく我を  
責その痛魚かすのぶ刺をまはる少のり  
要事とまふふまといや中にわく痛やまはる  
夜昼まのど七日か間苦痛して湯水もあらず  
一より借六かまをまを一書若せ一を直り  
写せ一まのり

〇女の念力愛中れ高名

よつりくおろしど射ふ其矢をまはる嵐よる  
一も孝の一念に親を思ひ天の道され











ありけし視を文庫に置りて至るまで取らる  
 と幸にうちまう抛らちをば害く駿勃し  
 去れも差さえてそのら此禁欲の芳に差  
 ぶつうと引をむれはるしをち様く暮その  
 有きはぬをぬ障子に抗つてあつてまうやと  
 うと思へば様はさるに此言斬言も與て  
 多く謗を交れどもかくはまゝとい今日が  
 ちとめ起してると紙燭に火を掛け傍に  
 よる教をあげて是れいふの物より社  
 一巻又血まじれかきば板の窓を閉し  
 新選百物語二

といひ痛りやといひし疵を足れと  
 舌心を剣糸あつたれほどさうと不安な  
 れ内室の窓と思ひあゝありむい夢を  
 窓あつて眠ふ差又伽藍の東の境に  
 狐が居るとさう井の邊生すい葉とさ  
 て狐に抱つて組ぶさ後びつさやうが狐も命  
 めかぶるを逃れを逃れくといひと折れ  
 持あつた狐の吠に咽つて念を離して  
 ちとめやと思ふを起されけし血のつ  
 けし西邊東の境を足ると語れば言合

ゆく征どもく血のほきしそ不忠候されん邊と  
て死し急を初とれれば年ふか古狐咥をふりれ  
そ穿ても甚差との邊分は移さおられませい

○悲雲なる小密夫の玉象

小長衣とて書やうい呼呼貴しべ一貞女とも  
節女も古今に秀一稀若未世までもその名  
と縁せうの不賢女を曲せに不辨とらひ縁ぬと  
いひ白くといひ土とよふ後皆西朝の整制ありて  
悪むべ一人をして悪に導の罪人なりといふれ

新選前物語三

ふとれりのとハ崩とふとその所以を問へり合は  
ずのそと好んで人あへあうりあていふあかゆ  
うりと宣うるのね子の親のやうにふそのふれい  
假令おも不義淫乱のそをいりて女子の面もあ  
孝とせ一やてけくそと教へ一芝居の所難  
さぬのちやをぞてお奇るれ後ハ傾城やへ  
童れのみイヤ私史のといふ名ハ勿後守まも  
毒ちるに母親の好とて娘子を懸けしめて一  
番た鞆のあくぬ中くく幼るそ子対をてりてま  
ここのハ磨くの黒き脾とぬく若あまの付い



文とよと  
 くしきなるせ



の家をもち崩し遊ぶらの御説  
おみい審まの種とぬのせり今むい丹  
の園は稻村や善助とて呉服高賣とる人ありて  
お園とて娘をもち一ヶ只をうけ始とて諸人  
にまわる容色かれ父母の寵愛すかうは回  
舎育とま人も憐しと一年おちち大くは衣文  
坂は着後を望乳母婢を多くつ希屋地下て  
を堂上まうとやと名より師となり和歌を  
学せ柔の湯を女一初てりと利休流の人へ  
たのも長板まどもあてま人若へ向う岩又丸をく

新選百物語之

だけにお様がつまうと婢も寝て泣く  
明日は芝居よりしてまよと女形の容顔は氣  
さつ夢夢音をうめい仕立あふは望の年  
二れうぬ月をやはらけ回全にまはるうめいさ  
ひめてわすこのを身に長良や清七とてあまを  
とくぬお供両替高利の嫁を白紙  
婚二世うけてま婚の中は英金とて振る形  
あまむつしとさとも其くに懐妊して五れやう  
か家和子とておけて世後よすとも夢をい  
地の上のハ各射と讚そやさけり歌あり

秋の赤くはあつ紅もつとも命にぞくくして  
て病氣とよゆをわん共何となく面癩々  
氣むつうげ小妻く物井をりき唇色をれバ  
あ親男姑尊小いん登るを医者へも見を業よ  
臧とく駮さたら誘林依伴へ立礼をけ奉る  
御穿茶ぬ肝臓をくらんのをとを後世  
の綴つてを命者定離とはあうまうまされしを  
わが望の露と流ゆ花さうり香船の穴松久  
て涙の種とるま々く一柳とぞ野をよ医りし  
使より七園が姿あまくと親れどくはつて

新選百物語三

あつてとつていふまんぢとと草笥のりんぬをさう  
となく傍よまうてうまうとやと面をれだ  
雲霧れとくあてふんもされぬ水の舟何ゆら  
みたりしぞと親おれも返すもせと涙にむせ  
斗りて様おもされ紅ハ粧さう可やわまうみり  
清七よまろ張うて迷い一がんと二處くの件  
判とる一後移んがら小吊へとも可も遠りを安と  
そは概の草笥の言敷此中うるる具事をも純  
若せうくと張るぞ赤い医れも様と安の志見く  
とらうたわらぬ赤張るんが一門中記せたるあ



すべき最親なる具なきはせり此のふく佛判と  
 ありともすしとをきこれまふ所のなるく凡そ  
 及らる西通得悉儀のらるるありては疑はれ退くは  
 一と其ら諸國又名高き禪僧太元和為に  
 を語れば和尙あざくんんん後分とありしす  
 を見とけ迷ひとすし得たを一人と和夜とを比  
 ば一人長身とあれ一人に之れ一家の詞もちが  
 くと亡者の下と廢れとく算旨のまゝにわ  
 目をもいふと算旨とまふ候をき一と一有  
 二と和尙始終をよくとく亡者の終と考あり

新選面物語三

十四

死すの程いあるゆかを暫くは問の人さるるい  
 をとてを契りしやの牛わを一人もあ  
 へるは進付ありと見をりんと其方の亡者た  
 に向いしりゝ寂の居たりとて立あるる算旨の中  
 一とたよとあつたつ顧れも始よひをせとて其の  
 牛も算旨の下とてこれの不義の玉を料十  
 色をりし封しりてをを速いの程を  
 と幽霊にさしひくんやとて賊伴とてしやとて  
 焼とて人目わい見を薄くと約束ひたわりの言ふ  
 亡者たといふとてのふ合掌するを一人あり

朝日あさひの雲いしのどくふがまじく瀟せうてかちのまうりたる  
和尚わうしやうの髭ひげあさうは一門いちもんのどくを咄はなまし亡なる  
ふでひあつたて寝ねまき後あひを吊たるべくと多おほ敷しり被お  
ぬまども佛ぶつ系けいこそ焼やまら煙けむりの中なかにまゝくと亡な  
老おほい再びまた嬰えいをわりて大悟だいご知微ちゐの引ひきひて則すなは  
ち今いま佛ぶつ果くわと得えたりと紫雲むらさきぐもにまゝとて死しなれ  
アと大元おほもと和尚わうしやうの字なづあはれおびりぞと少すくしう

新選百物語卷三終